

聖書：マタイ 6：25～32

説教題：心配無用

日時：2018年9月23日（朝拝）

今日のみことばの中で一番多く出て来る言葉は何でしょうか。それは「心配」という言葉です。私たちは色々なことが心配になります。仕事のこと、収入のこと、経済的なこと、老後のこと、健康のこと、家族や、子どもたちの将来のこと、……。そして何が良くない兆候が見られると一気に不安になり、神経をすり減らし、疲れ切ってしまう。しかしイエス様は今日の箇所で「心配するのはやめなさい」と言っています。今している心配をそこでストップしなさい。心配はあなたがた信仰者には無用のものである。あなたがたはもっと違う生き方に召されているのだと言っておられます。

なぜ私たちは心配するのでしょうか。イエス様は私たちの医者としてはっきり診断を下しています。それは30節の「信仰の薄い人たちよ」という部分です。イエス様は「信仰がない」とは言っていません。それはそこにあることはある。しかし問題はそれが薄く、小さいこと。ですから私たちが心配する生活から脱出しようと願うなら、より十分な信仰を持つことを求めて行く必要があります。心配を克服するカギは信仰にあるのです。

ではどうすれば私たちは神への信仰をより厚いものにすることができるのでしょうか。イエス様がここで示しておられる道筋は「良く考えることによって」です。イエス様は「だから」とか「そういうわけだから」という言葉を何度も使っています（日本語でも25節、30節、31節、34節）。イエス様はただ「心配するな！」とは仰らず、これこれこういうわけ「だから」心配は無用なのだとその理由を提示しておられます。ですから大事なことは、私たちがイエス様に導かれて、まずその理由を十分に思い巡らすことです。その時にまさに心配は無用であること、それはナンセンスであることが分かって来る。そして実はとてつもない恵みに生かされている自分であることを発見して、心配と恐れではなく、感謝と信頼の生活に導かれることになるのです。

まずイエス様が私たちに良く考えるようにと示している事実は25節です。「ですから、わたしはあなたがたに言います。何を食べようか何を飲もうかと、自分のいのちのことで心配したり、何を着ようかと、自分のからだのことで心配したりするのはやめなさい。

いのちは食べ物以上のもの、からだは着る物以上のものではありませんか。」 大事なポイントは最後の文章にあります。いのちは食べ物以上のもの、体は着る物以上のもの。これは何を言っているのでしょうか。ここにある前提は、より大切な「いのち」や「からだ」を私たちにくださったのは神であるということです。そしてそうであるなら、その神がいのちやからだの維持のために必要な「食べ物」や「着る物」を与えてくださらなかったら、ご自分で矛盾したことをしていることになります。大切ないのちを与えておきながら、食べ物が足りなくて、そのいのちが終わりとなったなら、神は一体何をやっているのかと言われてしまいます。私たちはあまり良く考えないでとりあえず事を始めて、途中で頓挫することがありますが、神にはそんなことはありません。神はすべてのことを明確な目的と計画を持って行なわれ、かつそれを成し遂げるお方です。とするなら、いのちを与えて下さった方がどうしていのちの継続のために必要な食べ物を備えて下さらないことがあるのか、またからだを与えて下さった方がどうしてからだを守る着物を備えて下さらないはずがあるのかということになります。

ここに聖書が述べる創造論とこの世の進化論との大きな違いがあります。もし私たちが進化論に立つなら、ここで言われているような慰めはありません。進化論によれば、私たちが今こうして生きているのは単なる偶然によります。私たちは目的や意味を与えられて生まれて来たのではなく、むしろ自分でそれを見出して行かなければならない。そしてこの世は強い者が生き残る弱肉強食の世界ですから、人生はサバイバルゲームであり、他の人に負けてはいられません。生き残る権利のある優秀な自分であることをウソでもアピールして勝ち抜いて行かなければいけない競争社会となります。しかし聖書は創造論を教えています。神が一人一人にいのちを与え、一人一人の人生に明確な目的と意味を持っています。とするなら神がその人に持たれた目的と計画が成し遂げられる前に、その人の命が突然終わりになるというようなことは主権者なるお方の前では決して起こり得ない。いのちとからだを与えた神は、その人に対して持たれた計画がみな実現するまで必ずその人の生涯を守り導かれる。このことを良く考える時、私たちは色々な心配から解放されます。なぜなら自分は何より神の御手の内にあると知るからです。そしてその神は私に対して持って下さった良い目的と御心を必ず最終的に実現して下さると知るからです。

私はこのことを知ってから飛行機に乗るのが前より恐くなくなりました。最初に乗った時は楽しい記憶しか残っていませんが、一度怖い思いをしてからはとても苦手になり

ました。飛行機は他の交通手段に比べて最も事故率の少ない安全な乗り物だと聞かされても、万が一雲の上でエンジンから火が出たり、乱気流に巻き込まれて翼が折れたりしたらどうなるのか。しかしある時、この御言葉の真理を知ってからはそうでなくなりました。私にいのちを与えてくださった神は私に定めた人生の目的をみな成し遂げるまでは私を守られる。物事に偶然はない。だから心配は無用である！と。もちろんこのことはクリスチャンが乗る飛行機は落ちたり、事故に会ったりすることはないという意味ではありません。仮にそうなったとしても、それも神の深いご計画と摂理の御手の内にあるということです。今の私にそのことが良く理解できなくても神はきちんとした目的を持って導いておられる。その神の最善の計画としてそのことが起こるのなら、私たちにとって究極的には何の損失もありません。天国に行ってその意味を親しく神から教えて頂き、私たちは必ず「アーメン」と神を賛美することができます。病気等についても同じでしょう。私たちは色々心配になるものです。しかし神のご計画がすべて実現する前に私の命が終わりになることはない。様々なデータをもとに心配し過ぎることはかえって命を縮めるだけです。そのように心配して多くの時間を過ごすよりも、私たちは確信と信仰に生きるべきなのです。神は私に定めて下さった計画をみな成就するまでは私の地上のいのちを守ってくださる。それがすべて成し遂げられて初めて神は私を天の住まいへと迎え入れて下さる。私の人生は神が守り、導いて下さっている人生である！このことを知る時、何と多くの心配は消え去り、それに代わって感謝と喜びが支配することでしょうか。私たちは心配することをやめ、神がご計画くださった目的に最後の1秒までも生き抜けるようにと心を向け、歩んで行くことが出来るのです。

イエス様はそのことを具体的に自然界にあるものを指し示しながら教えて行かれます。まず26節でこう言われました。「空の鳥を見なさい。種蒔きもせず、刈り入れもせず、倉に納めることもしません。」この空の鳥の生活状況を良く見つめるなら、人間の考えでは絶望的な毎日です。彼らは自分で種を蒔いたり、刈り入れたり、食べ物を保存しておくことが出来ません。私たちが持っているような性能の良い冷蔵庫もありません。彼らの状態に自分の身を置いてみれば、居ても立ってもいられなくなるような弱さの中に彼らは置かれていることが分かります。しかし鳥たちは元気に飛び回って生活しています。なぜそうできるのでしょうか。それは天の父が養っていて下さるからだといエス様は言います。もちろん私たちはここから、私たちが何もしなくても神が養って下さるというように考えるはなりません。鳥は人間のように種をまいたり、刈り入れたり、倉に納めることはできませんが、それでもえさを得るために飛び回り、自分たちのでき

ることを精一杯しています。ですから私たちも当然、自分のできること、すべきことはするのです。Ⅱテサロニケ 3 章 10 節：「働きたくない者は食べるな」。そのように自分のすべきことを行いつつ、心配はしない。イエス様はここで「あなたがたはその鳥よりも、ずっと価値があるではありませんか」と言っています。これはどういう意味でしょうか。私たち人間は存在的に鳥より優れているということでしょうか。もしそれだけなら、それはある意味で当たり前のことです。しかしそれよりももっと強い意味がここには込められていると考えられます。すなわちただすぐれているのではなく、「神の目にもっと価値があるものとして見られている。注目すべきは、ここで「父」という言葉は私たちとの関係においてだけ神に当てはめられていることです。空の鳥たちに対して「彼らの父」という風には言われていません。もちろん神は鳥たちも心に留め、慈しんでおられます。しかし 26 節で「あなたがたの天の父」とだけ言われています。つまり私たちに対しては「父」と「子」という特別の関係にいてくださる。神はそのためにご自身の大切な一人子さえも私たちに与えてくださいました。そのような天の父が、どうしてご自身の特別な子どもである私たちを見守らず、また一瞬たりとて無関心の内に放置されることなどあり得るでしょうか。空の鳥に食べ物を与え、養っている神は、ましてやその子どもである私たちにはもっともっと良くしてくださるはずではないでしょうか。27 節には心配していいことは何もないことが述べられています。心配したからと言って自分のいのちを一日でも延ばすことができるわけではありません。だからそのことはやめよ！とされています。

28 節からは、今度は地面の野の花を指して語られます。これも神が育て、咲かせているものです。その美しさは栄華を極めたソロモン以上であると言われています。であるならましてやあなたがたには良くしてくださるはずではないか。からだを与えた神は、そのからだのために必要な着物を備えてくださるはずではないかと言われています。

こうして今日の箇所結論が 31～32 節に出て来ます。「ですから、何を食べようか、何を飲もうか、何を着ようかと言って、心配しなくてよいのです。」 「これらのものはすべて異邦人が切に求めているものです」と言われています。異邦人とはここではまことの神を知らない人々を指しています。その人々はより頼むべき神を知らないので、自分で自分の生活を守り、成り立たせようと、日々心配しながら生きている。しかしあなたがたは、それとは対照的な生き方ができるはずであるとイエス様は言われます。私たちが持つべき確信は 32 節後半にありますように「あなたがたにこれらのものすべて

が必要であることは、あなたがたの天の父が知っておられます」ということです。私たちは様々な困難や必要を前にして、ともすると心配で心が一杯になりがちですが、その時に思い起こすべきことはこのことです。それは私は一人ではないということ。私以上に私のことを深く知り、すべてをご存知の方が天におられる。その方が私たちの思いをはるかに超えた知恵と全能の御力を持って、これまでも、またこれからも、私を上から支え、導いてくださる。確かに私たちの目の前の問題が今後どのように導かれるか、私たちは前もって知ることができません。神の方法は、私たちの小さな頭が考える方法とはしばしば大きく異なります。しかし私たちが知り、確信していることは、私たちの天の父のお考えにまさる最高最善の道はないということ。ですから私たちは自分の小さな頭でくよくよ考えて、心配ばかりする人生を歩むのではなく、この神にすべてをお任せし、大船に乗ったつもりで、喜びと賛美をもって歩いて行くことができるのです。そしてはや自分の生活に関する心配から解放された者として、私たちはもっと別の価値あることに心を向けて歩むことができる。その私たちに開かれている新しい生き方が次回見る 33 節にあります。「まず神の国と神の義を求めなさい」（この御言葉については来週見ます。）

以上、私たちの生活を振り返ってどうでしょうか。毎日の生活が「心配」で特徴づけられていることはないでしょうか。信仰をいただいているのに異邦人のように生活していることはないでしょうか。私たちは今日のイエス様の言葉をもとにして、良く考えたいと思います。私たちにいのちとからだを与えてくださった神は、私たちの人生に明確な目的を持っていて下さいます。それが全部成し遂げられるまで私たちの地上の命が取り去られることはありません。私のために神が定めてくださったご計画がみな実現された後、神は私たちを天のご自身のみもとへと召されます。私たちはこの神を仰いで大いに安心し、賛美と喜びをもってこの方に従う歩みへ進みたいと思います。神を見失って心配に突き動かされた一生を過ごし、最後の日に「お前は一体地上で何をやって来たのか」と言われるような生活ではなく、天の父に信頼を置き、この方とともに歩むところに与えられる日々新しい力と喜びに生き、そうして真に意味のある歩み、価値のある歩みへと進みたいと思います。